

尾崎紅葉『心の闇』私論(三)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 有美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4711

尾崎紅葉『心の闇』私論 (三)

木村有美子

はじめに

『心の闇』は明治二十六年六月一日から七月十一日まで「読売新聞」に連載され、翌年五月に春陽堂から単行出版された尾崎紅葉の代表作の一つである。

『紅葉全集』全十三巻(平5・10、平7・9 岩波書店^(倉))の出版によって、紅葉を再評価する土壌が整った感があったが、最近になって明治文学の叢書が相次いで企画され、『明治の文学 第六巻 尾崎紅葉』(斎藤美奈子編集・解説 平13・2 筑摩書房)や『新日本古典文学大系明治編 第十九巻 尾崎紅葉集』(須田千里・松村友視校注・解説 平15・7 岩波書店)の刊行をみた。発表当時から総じて好評であったにも拘わらず、文学全集に収録されることの少なかった『心の闇』を、右の両書は取り上げており、漸くその作品的価値が認知されてきたかのようなのである。特に後者、須田氏の校注、解説は『心の闇』を読むにあたっての豊かな示唆に富んでお

り、筆者も多くの教示を頂戴した。

本稿はタイトルが示すとおり、『心の闇』についての三度目の論考である。第一稿^(注2)では研究史を踏まえた上で、この作品が「前近代」と「近代」という対比的なメッセージに満ちていること、主人公佐の市が盲目故に、明治という時代の恩恵から全く無縁であったばかりでなく、一人の男性としても扱われない孤独を背負っていたことを論じた。特に、佐の市の悲哀が容貌や家庭環境、経済状況等に拡散されず、盲目である一点に集約されるよう設定されている意味について問い直し、後の悲惨小説の先駆的作品とみなす捉え方に異を唱えたつもりである。

第二稿^(注3)では、『心の闇』の構成について、従来の紅葉作品にあるようなストーリーの起伏はみられないが、同じシチュエーションの反復(一章と七章、二章と七章)や変相(一章と五章、四章と九章)を用いて、七章のクライマックスへと導き、その後のお久米の意識の転換や佐の市の恋着を鮮やかに示してみせる等、紅葉の読者

を引き込む工夫が如実に示されていることを指摘した。

また、この作品が紅葉の〈実地観察〉の上に成ったものであることを検証し、お久米の嫁ぎ先である築居家の位置だけが明確に示されていない意味を考察した。最終章(十章)では、傍目には〈外に苦労があるべきやう〉もない佐の市、〈良家〉の若奥様であるお久米が、現実を離れた闇の領域で互いの存在の大きさに苦悩している姿が描かれている。ここに至って佐の市は、漸く一人の男性としてお久米に対峙できたのである。しかしそれは、当時の地図を持ち出してでも辿ることのできない世界——時も場所も超越した普遍的な精神の世界に於てである。紅葉があえて築居家の位置を明示しなかったのは、写実の手法では描ききれない次元に、この作品が向かっていることを示す意図があつたのではなからうか。以上が前稿の論旨である。

本稿では、前二稿で取り上げることのできなかったテーマ——特に、「語り」や作中に描かれた「金銭欲」について論じてみたいと思ふ。

一、語りの変容について

『心の闇』は〈宇都宮停車場の混雑〉にふれた後、〈此土地に第一と知られしる〉〈千束屋といふ旅籠屋〉の門を入る一人の按摩を描写するところから始まる。その様子は〈撫肩の後姿悄然と〉と語り起こされ、

年齢は二十四五なるべし。剃立の頭顱は、鬢冠りたるかと見ゆるばかりに状好く円滑として、顔の色は精霊棚の白茄子の如く、両眼ともに膠もて粘けたらむやうに直と盲ひたり。

仕立おろしと見ゆる手織木綿の袷に、やゝ古びたる鉄納戸の絹紬の羽織を、何急ぎてか襟も反さず。茶小倉の帯を胸高に結びて、毛縹子の襦袢の襟を吭の扼るほど緊と合せ、洗晒しの白足袋に、似合はしくも穿馴らしたる日光下駄の行歩覚束なからず、(以下略)

とその外見を描写する。

語り手の眼に写ったことを淡々と報じただけに思われる文章であるが、読者は色々な事柄を読み取ることが出来る。例えば、〈仕立おろし〉らしき袷、〈洗晒しの白足袋〉を身につけているところからみて、彼には行き届いた世話をしてくれる人物が居るらしいこと、語り手の推測どおりの年齢であれば、〈胸高に結〉んだ〈茶小倉の帯〉や〈吭の扼るほど緊と合せ〉られた〈襦袢の襟〉は子供っぽさ、さらには神経質さを感じさせるものであること、〈穿馴らしたる日光下駄の行歩覚束なからず〉とあるから盲目となつてからある程度の時間が経過していること等がうかがえるのである。しかしながら、〈年齢は二十四五なるべし〉、〈仕立下ろしと見ゆる〉〈何急ぎてか〉という表現から、語り手がこの按摩の何もかもを熟知しているのではないことも推量できる。

続く按摩と番頭との会話(ここで彼の名が佐の市であることが明らかに)や、〈勝手知りたる廊下伝ひに〉〈主人の居間〉に行く

様子から、彼が千束屋と古くからの馴染みであることが知れるのであるが、これも佐の市の行動や他者との会話、表情、しぐさを観察し描写しているに過ぎず、内面を分析してみせるといったことはないのである。

この一章における語りスタイルは、三章の半ば、佐の市の生い立ちを語り始めるまで継続する。時として、足尾へ行く客に対する〈こんな憎い奴には思入れ高売しても冥利は尽きまじ〉という佐の市の心中の声が挿まれたり(二章)、〈床には入れど、心に蟠まる塊ありて〉と眠れぬ理由を説明したりする(三章)箇所もあるが、内面描写と呼べるほどのものでもない。むしろ、傍観者の立場を強調するように、〈何思ひけむ〉(二章)、〈何思ふらむ〉(三章)と云うばかりで佐の市の物思いの内容には踏み込もうとはしないのである。それは、佐の市の母親お民を描写するのに、〈年紀は四十五六かとも見えて、雨にも風にも毎日出るからは、何か商売なるべし。〉と推量で語るところにも現れている。

そのスタイルが崩れ始めるのは、佐の市の生い立ちから、〈千束屋のお蔭〉で〈一廉の稼する身になれ〉るまでが語られるあたりからである。現在の佐の市の観察者であったはずの語り手は、佐の市だけでなく、お民についてもその夫との生活や夫を亡くしてからの奮闘ぶり、佐の市との親子関係まで知る、時間軸を遡る視野を持つようになる。

そしてその直後——三章の後半、初出で言うなら第八回——から、佐の市の内面の代弁者へと変貌していくのである。〈五十年の命を半

分に、三度の食を一度にしても、一双の眼をこそ、と望むなるべし。〉〈我真意を識らむものは、誰か至理とも可憐とも思はざるべき、と渠は独り合点したりけり。〉〈その至理とも可憐とも、他の思ふべしとの、(中略)宇都宮中に唯一人、臆気ながら識れる人ありとは、佐の市が胸に絶えせぬ思なり〉と母親も気付いていない佐の市の本音が率直に語られていく。千束屋の〈騒がしき響は、我思ふ人の搔鳴らす琴の調の如く、佐の市の心を〈融々〉とさせ、〈来と去〉の〈主人の居間〉での〈何かあらぬ小半時の茶話〉は〈身は此処に此まゝ装置になれと冀ふばかり〉の〈心酔の快樂〉となつていくこと、こうして読者に伝えられていくのである。

その後、内海秘書官の千束屋投宿や万床でのお久米の噂をめぐる吉とのいざこざと、話は展開していくのだが、語り手は徐々に饒舌になつていく。特にストーリーの展開とは直接に関わらない、いわゆる「世間智」を披露する形でそれは示される。既に三章のお民のこれまでを紹介した箇所にも、〈相好の下作なるは今更治すべき名葉もあらず、天資ほど悲きは無〉いが、〈心は自から形に表はれて〉くるものだ、あるいは、〈国亡びて忠臣頭はれ、家貧くして孝子出づとはいへど、銭無くては親子の擲合も起る例〉が多いといった「世間智」と呼べるものは見出せるが、七章になると、その分量は格段に増加する。

例えば、〈家の為ともなるべき智を望むは、日中に大金を拾はむとする如く、(中略)まづは例の無きことに諦むるが無事なるべし。〉〈老舗も素封も潰るゝは、響か但しは三代目の世に限り。〉〈嫁

を捜すは首狩に同じく、大方鼻先に在るべきを知らで過ぎ）てしまふものと、智取りや嫁捜しの難さを語ったり、《時雨月》は《出雲の大社に神々の会まり給ひて、世間の縁を結ばるゝ》という、言伝えを挿んだり、《世間普通の素封家の悴》がいかにかだらしないか、を皮肉ったりするのである。また七章の後半には《一生花の色を識らず、日の影を見ず、不便は最愛なる親の顔さへ知らず》に在る盲人の《之をと念懸けたる執着は幾許ぞや。》という記述があるが、これも盲人に対する世間一般の把握を示したものかも知れない。同様に九章には当時の《夢》についての認識が紹介されており、広義に解釈すれば一種の「世間智」と捉えることもできよう。

こうした傾向について、岡保生氏は、紅葉は権力階層に対して反感を感じながらも《現在の社会に甘んじて耐えようとすする庶民と、その立場をひとしくしていた。ここから、紅葉のしばしば説く世間知の福音が生まれる。》あるいは、《こうした世間知を作中にさしはさむのは、西鶴にその先蹤があり、紅葉はそのひそみにならったものと思われる》と述べているが、語り手が外面の観察者であった時には、「世間智」は全く挿入されず、登場人物の過去や内面を語り始めてから現れてくるのは、興味深いことである。

興味深いといえ、語り手の変貌、つまり外面の観察者から時間軸を超越した視野を獲得するようになり、登場人物の内面を熟知する存在へと変貌していく——につれて二つの大きな変化が作品中に生じていることが挙げられる。

まず一つは、連載開始当初、意識的に不気味さを演出しようとする

の意図が顕著であったが、生い立ちを語り始めたあたりから、その傾向は薄れ、代わって紅葉本来のユーモラスな表現が多用されるようになることである。

先に引用したように、冒頭に近い部分では、色白の佐の市を、《顔の色は精霊棚の白茄子の如く》と表現しているし、眠る下女の臀部は《呪ひの社前に現はるゝといふ牛の姿にも似たりけり。》と喩えられているのである。須田千里氏の校注に拠ると、《丑の刻参りの絵に、牛の姿を書き加えて幻怪性を高めたもの》があったとのことであるから、この二箇所は比喩の意図したところは、やはり不気味さの演出であろう。岡保生氏は

深夜の静寂さに、ある不気味さを感じるとはいへ、眠りこけた下女の大きな臀を、のろいの社前の牛の姿に見立てるのは、奇警にすぎる比喩といふべきであろう。こうした比喩には、ユーモアへの配慮が裏づけられていると見ることができ、

(以下略)

と、この比喩の《不気味さ》より《ユーモアへの配慮》の方にウェイトを置いた捉え方を示しているが、《折々店に声する外は、何処も静まりて死せるが如く、廊下の燈火白く、物陰の晦きに、》という描写の後に《下女の臀横はりて》と続くところからも、岡氏には同調し難いものがある。

また、宿引に菓子をどこで貰ったかと聞かれて、《問ふには応へず、ひゝと笑》うところや、お久米にもらった《菓子の包紙》を《肌身に添へて》床に入る、次の箇所、

火鉢の傍に捨てたる菓子の包紙を拾ひ取りて床に帰り、臥ながら皺を伸して四つに畳みたるを、幾度か両の頬に推当て、鼻を嗅ぎちらして、果は内懐にしかと納め、肌身に添へて、三時過ぐる迄まじく。

という描写には、二十五歳の男性とは到底思えない、病的な執着ぶりが感じられるのである。

しかし、こうした不気味さを強調する描写は、七章のお久米の見る夢を別にすれば、三章の生い立ちを述べるあたりから影を潜めるようになる。その代わり、ユーモアを感じさせる表現が多くなる。

誰お多福に構ふもの無く、身は破鍋の砕けたる後に、果敢なく残る綴蓋と、(以下略)

と夫に先立たれたお民を描き、容貌に自信のある稲葉の本音は、

此娘も今に先方からお酌と押懸けて、離れがたなくして見せむと、硝子盃を挙げて反身になる時、先生の意気八荒を呑み、眼中秘書官も知事もあらざりけり。

と揶揄される。また属領たちの眼から見た、お久米と女中たちの違ひは牛鍋に喩えられる。

彼(お久米)を見て此(女中たち)を見るに、前に侍る婢等は、殆ど牛肉に於ける葱の相違にて、牛肉は彼方へ引揚げられの、我等に残るは葱ばかり。

客の前で松という女中にお久米への伝言を頼もうとする佐の市の様子は、

湯沸提げて蒼皇出て行くを賞束無く、お松様々と居去り出

せば、客の老人は恐い顔して、お松様は不用から、私の肩を揉むでくれ。

と描写される。さらに、万床での佐の市と吉の会話は、

佐の市はやゝ急心になりて、親方一件とは甚麽いふ事と頸を出せば、一けんは二間の半分さ、と吉が洒落、こんなのは宇都宮でも今は行らじ。

といった調子で描かれる。また、この吉を指して「血氣壯の懶惰漢、世間普通の素封家の悴」を指して「実業々と情けてある輩」と言つてのけるあたりにもユーモアのセンスが窺える。九章では新郎喜一郎が雪の中で転ぶ様を次のように描いている。

勢好く築山の麓に着きたる比、木根に躓きて一亡、おつと来たと、手近の柳の枝に縋りしに、脆くも折れて横倒に、石燈籠を枕にすてんころり。

このように、ユーモアを感じさせる描写は数多く見出せるのである。岡保生氏や須田千里氏の指摘にあるように、これは紅葉生来の持ち味の一つであると同時に、「陰惨になりがちな作品に明るさをもたらす」^(原)効果をも挙げていると言える。七章に於ける夢のシーンの不気味さが引き立つのも、他の場面が怪奇色一辺倒でなく、右に挙げたような滑稽味を含んでいるためかもしれない。

語り手の変貌につれて変化したことの二つ目は、佐の市を突き放して批判的な眼差しで観察してきた語り手が、次第に佐の市に寄添い、共感を感じるまでになつていくことである。

便宜上、分けて述べてはいるが、実はこの一つ目と二つ目の変化

は密接に連動しているのである。語り手が佐の市やその周辺を怪物的に描こうと意図する時、その根底には常識の範囲から逸脱するものに對する批判の眼差しが含まれているようだ。

語り手の佐の市への批判が最も端的に吐露されるのは、三章の次の箇所である。

その菓子に誰に貰つたと想ひなさる、と真顔に問ひ懸くる。
行年二十五歳の男の辞にはあらず。

と、その幼稚さを嘲笑してみせる。その後、先に引用した眠れぬ佐の市が菓子の包紙を肌身に添えて床に入る場面が続くのであるが、子供っぽさは一途で無邪気な反面、自己中心的な執着に繋がることがままある。語り手は佐の市の、〈眼には不自由にても此（お金）に事欠かねば、眼明の貧乏よりは数等幸甚と、母親に語〉る姿と、〈五十年の命を半分に、三度の食を一度にしても、一双の眼を〉望む本音の両面を把握している。だが、佐の市が盲目となつて十九年が経つても、今だに〈好程に断念〉もせず〈苦に病〉んでいることを〈自ら訝しくも異くも思ふべき〉であるのに、〈我真意を識らむ〉人は〈至理とも可憐とも思〉つてくれると考え、〈宇都宮中に唯一人、臍氣ながら〉自分の心を〈識れる人〉がいてと思つていふことについては、〈渠は独り合点したりけり〉〈其人の識るといふも、確然ならざる佐の市が推量〉である、とそれが佐の市の独断であることを付け加えずにはいられないのである。

ところが、七章に至つて、お久米の縁談を知つた佐の市の心情を語る時、ひとりよがりの思い込みの結果である、などと言う批判じ

みた言葉は一切挿まれない。むしろ佐の市の心情に寄添い、その失望を慰謝するかのような語り口を用いるのである。例えば、佐の市の〈心の中〉を表すのに、〈金銀貨を椽の下の土深く埋めお〉いた〈吝嗇者〉が、〈その後堀起せば、瓶はあれども実は虚に〉なつていた、その〈驚駭と、失望と、悲歎と、憤恨も、なか／＼逮ぶべくも〉ない、あるいは、〈饑ゑたるものゝ食の如く、其外には何の願も望もあらむ、唯一の樂みを奪はれたる、失望と悲歎と憤恨とを攪乱されたる心の業〉である、というように比喩を多用して、救いようのない状況を伝えようとするのである。

またここでは、〈一生を闇黒に送〉らねばならない盲人の哀しさにもふれ、〈花見の群集を分けゆく〉盲人に對して、〈按摩の花不見〉と囁す人々もいたが、〈哀深く、心ある人〉は〈酔を醒して、花の露ならぬ涙に袖を沾〉したというエピソードを紹介している。この七章に於ける語り手は、明らかに〈花の色を識らず〉に過ごさねばならない盲人に涙する一人であらうと思われる。

その中でも、語り手が佐の市に深い同情を寄せていることが明らかなのは本作品の最後の一行、

言はずして思い、疑ひて懼る。是も恋か、心の闇。

という箇所ではあるまいか。〈言はずして思〉う佐の市、〈疑ひて懼〉れるお久米、互いの気持ちを確認する術も無く、かといつて際限があるとも思えない闇の世界で、二人は確かに囚われあつて、これも恋なのではないか、と語り手は言うのである。佐の市にとつて、これほどの自分への理解があるだろうか。佐の市の〈按摩だと

て人間なりや、人情はありまする」という叫びは周囲には受けとめられず、彼は永らく一人の男性として扱われずに来たのである。お久米にすれば、危惧と不安の感情に過ぎないかもしれないが、少なくとも佐の市は今一男性としてお久米の前に立っているのである。須田下里氏も「佐の市はもちろんのこと、恋されているかと恐れるお久米も、広い意味では恋の惑いの中にある。この惑いが永く続くことと併せ、^{産し}從來にない新しい恋のかたちと言えるだろう。」との見解を示している。

思えば、お久米の夫となる喜一郎の設定は、佐の市にとって非常に皮肉なものである。七章での喜一郎に関する記述を次に抜き出してみる。

爰に容色を望にて嫁を求むる方あり。県會議員築居喜六の長男、喜一郎といひて今年二十六になりぬ。

父が立てたる肥料商会の支配するも名のみにはあらず。世間普通の素封家の粹の如く、(中略)無上に実業々々と情けてゐる輩と違ひ、世事に賢く、学問もありて、商業は機敏にやつてのけ、交際も上手にして、かゝるを明治年間の息子氣質とも謂ひつべき為人。父親は殊外頼みにして、万般に次官といふところを勤めさせ、商会大方一手に委て少しも懸念無く、この息子大当り、喜六様の若き頃はあの半分、と親類一門の誉物なり。

まず、年齢は佐の市の一歳上、同年代の設定である。また、喜一郎は「嫁を求むる」条件として第一に「容色」を挙げる。菅聡子氏

が指摘したように、^{産し}「佐の市が、決して自ら目にするのできないお久米の「容色」という一事によって、喜一郎とお久米は結ばれる」ことになる。佐の市の言う「其氣質やら行為やら、眼のある方が一目見ては分らぬこと」——即ちお久米の身分は全く問題にはされていないのである。さらに嫁捜しの条件はこれだけではない。當時としては当然かもしれないが、次に求められるのは「貞操」である。現に、宇都宮一の美人、(かの娘鑑に東の関にすわりたる肥料問屋)のお村は、「店の治三郎と出来台」っていたため、嫁候補から外される。お久米についても、「人の噂の秘書官一条」が「曇り」として問題視される。結局「其事は無根」と分かって縁談が進むのであるが、ここで思い出すのは、万床での佐の市と吉との諍いである。「お久米が客の枕上風月なつた」という吉に反論したために、佐の市は頭に怪我を負う。しかし彼は「撲たれても殴かれても、千束屋様の為と思へば少しも悔しいことは無い。武人ならば此も忠義の為だ、と笑ふてしま」う。本音を言えば、千束屋への「忠義」というより、恋しいお久米の名譽を守りたかったのであるが、佐の市が非力を顧みず、「一鉄無法の我武捨良」である吉に対抗してまで守ろうとしたお久米の「貞操」は、お久米と喜一郎の結婚を進める助けとはなっても、佐の市には、お久米の裁縫による浴衣と「鮪沢山」の鮪とを与えたにすぎなかった。

お民に言わせれば「天へ梯子掛けてお星様を拾ふやうな、出来ない相談」であろうとも、もし「一双の眼」があったなら「県庁の役人」になりたいというのが佐の市の切なる「望」みであった。つま

り佐の市も明治の青年が一樣に持っていた「立身出世」の夢を抱いていたということである。一方、お久米も、〈旅籠屋〉という〈今の渡世を好ましからず、官員などの内方が心の望〉であると母親に打ち明けている。もし、佐の市の眼が見えていたら、この二人が結ばれる可能性は皆無ではなかったはずである。

しかし、佐の市は盲目故に、〈県庁の役人〉はおろか、〈盲目のことなれば商売はいづれ揉療治〉と職業選択の自由さえ与えられなかった。盲目であることが、菅聡子氏のいう〈新時代の価値体系〉から佐の市を弾き出し、夢実現の可能性を奪ったのである。

それに対して喜一郎は、新時代の申し子のようなのである。〈県会議員〉の長男であり、〈学問もあり〉、〈父が立てたる肥料商會〉を〈大方一手〉に引き受けて〈機敏にやつてのけ〉る、家柄も社会的地位も申し分なく、さらに実力まで持ち合わせているのである。まさに〈明治年間の息子氣質〉の具現として設定されている。だからこそ〈容色を望みて嫁を求むる〉ことが許されるのである。

このように、喜一郎は佐の市が持っていないものを全て賦与された存在として立ち現れ、〈千束屋方〉を〈願ひても無き仕合と、一も二も無く承知〉させてしまう。第一稿でもふれたが、お久米の〈慚かし〉(羞かし)という喜一郎に対する感情は、異性として彼を意識してのものであり、この結婚をお久米自身も望んでいたことが窺えるのである。

この両者の置かれている立場の落差が残酷なまでに示されるのは喜一郎とお久米の婚礼の夜の描写である。〈普請雑作に手を尽した

る〉(離座敷)で睦みあう新婚の二人と、〈夜深の雪〉の中、築居家の〈扉外を彷徨〉う佐の市。片や喜一郎は望みどおりの美しい新妻を抱く勝者であり、片や佐の市は〈扉の外に立尽〉すことしかできない敗者であるという現実が露わに示されている。

先に述べたように、徐々に佐の市の心情に共感を覚えるようになっていた語り手にも、お久米をめぐる喜一郎の優位は覆せはしない。しかし、語り手はこの非の打ち所のない〈明治年間の息子氣質〉の典型のような喜一郎に、ささやかな復讐を試みている。それは、新妻の目前で無様に転ぶという一条を挿んだことである。ユーモラスな表現の一例として先にも挙げた箇所であるが、寝巻きのうえに〈頭から外套〉を〈引被〉った喜一郎の姿はお久米の眼には〈奇體なる〉ものと映ったとあるし、〈横倒に、石燈籠を枕にすてんころり〉というのであるから、全身が雪まみれになったに違いない。〈外の問答〉を聞くため〈植込の間に分入〉る様子は〈のそく〉と描写され、いかにも不格好である。ここには深刻になりがちな話柄に軽みをもたせる効果以上に、〈夜深の雪〉の中を〈徘徊〉せざるを得なかった佐の市の切なさや、暖かい闇にいた喜一郎にも味あわせるための設定であったように思われるのである。

このように、『心の闇』に於ける語り手は、登場人物の外面的観察者から過去を遡る視点を持つようになり、さらには人にも語らぬ内面さえも熟知する存在へと変容していく。それにつれて、不気味さを漂わす怪奇色は薄れ、かわってユーモアを感じさせる描写が増えていく。と同時に、佐の市から距離をおいた批判めいた語りは影

を潜め、佐の市の心情に寄添う立場をとるようになっていく。最後の一文や喜一郎を雪中で転ばせたあたりに、それは象徴的に現れている。

ではこの語り手の変容は矛盾を生じさせてはいないのだろうか。確かに、一章で〈年齢は二十四五なるべし〉と推量で示されていた佐の市の年齢が〈行年二十五歳の男の辞にはあらじ〉と三章で断定的に語られる時、多少の違和感を読者に感じさせるかも知れない。が、今まで語り手の矛盾を指摘した論がないところをみても、その変容はごく自然なものとして受容されてきたと考えていいだろう。その理由は、語り手の変容が、うまく読者の求めるところと合致していたからではなからうか。

例えば、本稿の最初に引用した佐の市の外見を描写した部分から、読者は彼の足袋を洗っているのが誰であるか、帯の結び方から想像したとおりの子供っぽさの持ち主であるか、いつから眼を病んだのか、等々、様々な疑問や興味を抱くはずである。さらに読み進めば、千束屋と佐の市との関係や、お久米一人の居間になぜ佐の市は入れず、〈颯の上に屁ま〉らなければならなかったか、についても知りたいと思うであろう。お久米にだけ繰り返される佐の市の〈愚痴〉、〈相貌少しも肖たる処〉のない母親のお民も読者の想像をかきたてずにはいられない。語り手は淡々と外に現れている事柄を伝えながら、読者が回答や展開を心待ちにするよう、様々な布石を行っているのである。

語り手は自ら用意した、登場人物についてのより深い情報を、小

出しに提供しながら、過去を語り、内面を解剖することになる。つまり、『心の闇』に於ける語り手の変容は読者の存在を意識下に置いたものだったと言えるだろう。九章で〈すてんころり〉と転んだ喜一郎の不様さに、喝采を上げたのは佐の市一人ではなかったはずだ。立身出世が叶わなかった読者の多くが溜飲を下げたことだろう。そこには、読者の反応が即座にわかる新聞小説として発表されたという事情も絡んでいよう。が、岡保生氏の指摘したように、文学者として一種の成功者でありながらも、紅葉自身が常に庶民の側に立脚点を置いていたことが大きいのではないだろうか。当初の目論見から外れて、佐の市が不気味なだけの存在にならなかったところにも、それは読み取れるのである。

須田千里氏は、『心の闇』が、〈門下生泉鏡花が持つて居た種〉に拠るとする岡山花袋発言の信憑性の高さを認め、その作品が『黒猫』（北国新聞）明28・6・2——7・23）に近いものだったのではないかと論証している。その上で、〈しかし、だからといって『心の闇』の価値が下がるわけではない。むしろ対比することで、その美点は明瞭になる。〉と述べ、『黒猫』の〈言動が表に現れ〉た〈怪物染〉た富の市の執着ぶりや〈その激烈な結末〉と、『心の闇』の、〈ただ恋の恨みが綿々と語られていく〉〈無解決の結末〉とを比較して、鏡花の〈誇張した風〉を改めた〈花袋発言〉という^{（準）}。『心の闇』の方が〈当時の人々の共感をかち得た〉と指摘している。

須田氏の指摘どおり、佐の市は内面では富の市同様の恋着を抱き

ながら、その本音を決して（人に明か）したことはない。お久米の（佐の市が我を念へる気色は、我僻目にも、他の余所目にも懸らざりければ）という言葉がそれをよく物語っている。（命懸けても添はねばおかぬ、添はにや生きてる効が無い）という作中何度か繰り返される都々逸さえ、人前で唱われることは一度たりとない。いわば内語、独り言であって、聞くことができるのは、佐の市以外には語り手と読者しかない。この都々逸は佐の市の真情の吐露であると同時に、彼を生に繋ぎ止めているものについての自己確認の役割を担っているかのようなのである。亀井秀雄氏は（歌というよりむしろ呪文と言ふべきだろう）と捉えているが、もし（呪文）とするなら、それはお久米に対してだけではない。佐の市自身にも向けられていることを知るべきであろう。

所謂世間に於て佐の市はきわめて常識人である。両親不在の居間でお久米と二人きりになることを遠慮する良識の持ち主であり、千束屋の使用人たちとうまくやっていける協調性も持ち合わせている（善き仕事する）、（稟性良き）青年按摩なのである。

『黒猫』の富の市と違って、紅葉は佐の市に反社会的——もっとくだけて言えば、世間から後ろ指を差されるような行為はさせないのである。（命懸けても添はねばおかぬ）と唱いながらも、（主人筋の娘）であるお久米の間に踏み込むようなモラルを逸脱した行為は決してとらない。だからこそ、お久米の夢の形を借りて描かれることになったのである。

では、九章の、お久米の婚礼の夜、築居家の外を徘徊した行為は

反社会的とは言えないのか。現在の感覚でいうなら、これは一種のストーカー行為であろう。しかし当時に於ては、佐の市を詰問した巡査が自宅に送り届けることで放免したところからみても、モラルを逸脱したとまではいえない範囲のものだったと思われる。佐の市は覗き見をしたわけでも、お久米を脅迫したわけでもない。ただ、築居家の（摒外を彷徨）したに過ぎない。また佐の市は喜一郎に巡査との問答を聞かれ姿を目撃されたなどは、夢にも思わなかったであろう。彼にとっては、（例の都々逸）を小声で唱うのと同じく、築居家まで行ったことは、誰にも知られたくない秘め事であったに違いない。

第二稿で、『心の闇』の構成について論じた時、この一条が、四章の内海秘書官の（座敷を覗ひ、見咎められ）た行為の延長上にあることを指摘した。千束屋の二階から築居家へと空間的には飛躍するが、佐の市をこの行為に駆り立てた動機はただ一つ、お久米への執着である。お久米は、佐の市が母に語った内海の（座敷を覗）っていた訳を聞き、（何の事も無く、）（疑念）を（霽）らす。しかし（異しき秋の夢）が（影の如く心に添ひて、疑團は今に霽れず）にいたる新婚のお久米は、築居家の周囲を徘徊していた訳を、彼が巡査に答えたとおりだと単純に受け入れることができないのである。千束屋に入りする他に（一切何方へも召はれざるに（中略）夜更に出療治とは、いよく有るまじき事）だという根拠もあつたろうが、お久米の（怖れ）には、（もしや夢に見しやうの心ありて、此処まで跟けしにはあらざるか）という（此秋の夢）から生じた（疑團）

が大きく影響している。逆に言えば、お久米にとっては佐の市のこの行動が〈愚にもつかぬ夢〉であつたはずのものに強烈な現実味を与えてしまつたのである。

このお久米の〈怖れ〉に共感を覚えた読者には、婚礼の夜の佐の市は異常な存在として映るであろう。が、少なくとも佐の市は、お久米に自分の真情を伝えようと意図したのでもなければ、社会の規範から逸脱しようとしたのでもない。それは、この日以降嫁いだお久米に纏わりついたという記述がないことから判断できるように、佐の市の恋着はその胸一つに収められモラルを侵すこともなく、〈月に三度づゝ〉お久米の夢に現れる形で示されるのである。

以上『心の闇』の語り手の変容、さらに佐の市の、社会的に逸脱しない描かれ方についてみてきたが、須田氏の指摘どおり、こうした紅葉の工夫が〈当時の人々の共感をかち得た〉のであろう。二葉亭四迷の『浮雲』の語り手が、『心の闇』のそれと同様の変容を辿りながら、最後には主人公文三と一体化したあまり、語りと主人公の内語との区別を失い、混沌のうちに作品が閉じられてしまつたのと比較すると、紅葉が語りについて、また読者の存在について、いかに自覚的であつたかがわかるのである。

因みに、〈谷色〉が〈頗る〉で、〈氣質が優しく〉非の打ち所のない——しかしながら才子佳人型の小説のように物足りなかつたお久米が、七章の〈夢〉を境に心に闇を持つて生きた女性に変貌するあたりにも、読者は惹かれたに違いない。佐の市の造型だけでなく、ここにも『心の闇』が好評を博した理由があつたと思われる。

二、作中に描かれた金銭欲について

岡保生氏は、『心の闇』には〈従来の諸作品に見られた紅葉葉文学の特質が凝集した形で打ち出されて〉いると述べ、その一例として〈庶民のあくなき金銭への執着〉が描かれている点を挙げている。^(注4)

一読して『心の闇』の金銭に纏わる描写の多さは明らかである。例えば、第二章、足尾に行くという客がお久米を悪し様に言うのに立腹した佐の市の報復は、按摩の療治代を十銭と〈高売〉することであつた。元々〈上下六銭の規定〉のところを随分な〈高売〉である。そもそも、明治三十年ごろ東京で〈一時間近く揉み療治をしてその賃金が三銭だつた〉^(注5)というのだから〈規定〉自体が高いと言える。尤もこれは流しの按摩の療治代だということから、旅籠での料金と違ふのかもしれないが、このような形で腹いせするところに佐の市の金銭感覚がよく出ている。また〈都合五回の療治を仕舞〉つた佐の市が、まずすることは〈帯締め直し、銭の重りに崩るゝ財布の始末〉である。三章の記述に拠ると、〈金銭といふもの持たぬ心細さは、勝手知らぬ路に杖を奪られて、突放されたるも同じ〉だといつた十三歳の佐の市の一言がきっかけで、〈母子気を揃へて金溜むる事〉が〈無上の楽〉となつたという。〈鱈鱈一日も休まず。晦日には必ず蕎麦食ふ外に、無駄なる銭は費は〉ないという徹底ぶりなのである。『値段の明治大正昭和風俗史』に拠ると、明治二十七年の蕎麦(もり・かけ)の値段は一銭五厘、何とささやかな楽しみで

あることか。現在でも大晦日には年越し蕎麦を食べる習慣があるが、そこには〈細く長く〉大福なく過ごせるようにとの願いが込められているらしい。しかし一説に拠ると、蕎麦を晦日に食べるのには、昔金銀細工の職人たちが、こぼれた金銀の屑を集めるのに練った蕎麦粉を用いたことから、お金が儲かる、豊かになるという意味もあるという。他の贅沢は一切しないこの母子が〈必ずず〉食べると言うのだから、なんらかの縁起担ぎであろう。とすれば、〈細く長く〉ではなく、後者の意味を願うてのことではなかったか。とすれば、何気ない日常のエピソードにも金銭への執着が込められていたと言えよう。また、先に引用したように、お久米の縁談を知った佐の市の失望は〈大晦日に金遣せし人〉や〈椽の下〉に埋めておいた〈金銀貨〉の〈瓶〉が空になっていた〈吝嗇者〉といった金銭にからむ比喩をもって表されてもいるのである。第十章で明らかになるお民の商売が〈小金貨〉だということのも象徴的である。このように紅葉は、『心の闇』の中で、佐の市のお久米に対する恋着と並んで、この金銭欲にかなりの重点を置いているのである。

ではなぜ、佐の市を金銭に拘る人物として描いたのであるのか。これについては、右に挙げた十三歳の佐の市の言葉が手がかりとなる。佐の市は十一歳から杉山流を学び、十三歳で笛を吹いて往來を流し始めたという。六歳で失明してからそれまではお民の庇護の下にあったはずだが、十三歳で初めて世間の風に当たった実感がある（『金銭といふもの持たぬ心細さは・』という言葉である）。〈勝手知らぬ路に杖を奪られて、突放されたる〉という比喩は極めて切

実である。これからも判るように佐の市の金銭への執着は、盲目であることの不安と分かちがたく結び付いているのである。

〈佐の市の手一つにて二人が活計の立つやうにな〉り、お民は〈一錢髮結〉を辞め〈外の商売（小金貨）を始めた〉とあるが、〈上下三百文（三錢）〉が相場であったという流しの按摩であれば、家族を養うのは難しかったに違いない。流したからといって、必ずお呼びがかかるとは限らない、その不安定さは松原若五郎のルポルター^{（注）}にも見えるところである。それに比べて佐の市は、客足の絶え間ない千束屋に出入りを許されているお陰で、往來を流す苦勞もせずに安定した収入を得ているのである。

因みに佐の市の一月の収入は如何ほどであったのだろう。一回の療治の代金を〈規定〉の六錢、〈些少の病氣などは推しても千束屋へ行かぬ日はない〉というから毎日勤めたとして、一日三度の療治であれば五円四十錢、一日四度であれば七円二十錢になる。二章、五章には夜更けまで療治が立て込んでいる様子が描かれており、時としてはもっと稼げた日もあったであろう。『統値段の明治大正昭和風俗史』^{（注）}に拠ると小学校教員の初任給は明治三十年で八円だったという。これを見ると佐の市が経済的にかなり恵まれた立場にいたことがわかるのである。

お民は佐の市が一人前になってからも〈雀百歳まで躍を忘れぬ心懸〉と〈金溜むる事〉に精を出すのであるが、純粹に〈小金〉が〈子を産む〉こと、〈お金銭を貯へる〉ことに生きがいを感じているお民とは異なり、佐の市は〈眼明の貧乏よりは数等幸甚〉と言いな

から、屈折した感情を捨てきれないのである。岡保生氏は「佐の市とその母お民とを通して描き出された庶民のあくなき金銭への執着」と、二人の金銭欲を総括して捉えているが、その質の違いこそ重要なのではないだろうか。

佐の市の金銭への執着が、その発生時点から盲目の不安の裏返しであったことは、既に指摘したとおりである。「県庁の役人」になりたい、一人の男性として認められたいという願望も盲目故に叶えられなかった佐の市にとって、金銭だけがそんな社会に対抗できる唯一の手段なのである。「狂へども鳴りはする柱時計」を家に掛けられるのも、「小奇麗なる万床」へ「月代刺」に行けるのも、全て金銭があつてこそである。これは第一稿でもふれたことだが、佐の市が金銭に執着せざるを得ないのは、金銭で買える「もの」でしか、明治という時代を享受することができないからなのである。佐の市の金銭欲を語るとき、盲目であることは等閑視できない意味を持っている。母お民の金銭欲と異質であるというのは、この点に於てである。

最終章には、「今も折ふし」例の都々逸を「人に聞かさず独り唱う佐の市が描かれる。が、語り手は、「添はにや生きてる効が無い」と唱いながらも「毎夜千束屋へ療治に行」く佐の市の姿を、「強ち死なむともせず、命あらむ限りは錢の欲しげに」とやや冷めた眼で観察し、加えて、

命懸けてもと唱ふ恋人は誰にかあらむ。お久米は人の妻となりたれば、はや佐の市は生効のあらざらむ身なるを、なほ死

なむともせざるを見れば、或はお久米は命懸けたる人にはあらざらむか。

と、「死をもって恋に殉じよ」と言わんばかりの口調で佐の市を詰問する。お久米の結婚が決まった時、佐の市に寄り添い、その失望に同情的であったのは対照的とも思える。しかし語り手が同情し、共感したのは、愚直なまでに一途な恋心を抱く佐の市に対してであった。「命あらむ限りは錢の欲しげに」お久米の実家である千束屋に通う按摩に対してではないのである。

語り手は、ここで恋と金銭とを秤にかけてみせる。恋を失った者が金銭によって、生にしがみついている様を佐の市の姿に映しているのである。が、読み違えてはならないのは、失った恋が金銭によって補えるとは言っていないことである。以前同様、千束屋に療治に通う佐の市に「負けじと、お民も汗水垂らして小金貸」に精を出し、「親子の商売いづれも繁昌」したと語りながら、「佐の市の一度蒼白たる顔色は昔に復らず、貌の羸れたるは其儘にて、常に愁然として物を思ひぬ」と、お久米の縁談を知った時と変わらぬ愁いの中にいる佐の市を描いてみせる。「おとなしけれど陰気ならず、年齢よりは若々しくて仇無く、苦勞無げなる所をこそ、人には好かれし」という、かつての佐の市の生気に満ちた魅力は、「商売」がいくら「繁昌」しようとも取り返すことはできないのである。

岡保生氏は、「庶民のあくなき金銭への執着」は「紅葉終生の課題だった」という。紅葉最後の作品『金色夜叉』に於ける「愛と金銭との相克」のテーマは、この『心の闇』の中にも盛り込まれてい

る。人は金銭への執着をそう簡単には捨てきれない。その執着が人をこの世に繋ぎ止めることもある。けれども、失った心の拠りどころに、取って代わられるほどの力を持つものではないことを、最終章の語り手は語っているかのようである。

おわりに

本稿も、「語りの変容」「金銭欲について」の二項目を論じたところで紙面が尽きてしまった。この他に述べる予定であった項目の要点だけを次に記しておきたいと思う。

「早稲田文学」六十三号（明27・5）が、同時代評としては辛口の、〈佐の市の性格には尚幾多の心得がたき節なき能はず〉という批判を行ったが、筆者も僅かながら、同様の感を持っている。例えば、第二章では足尾へ行く客に、毎日会うお久米の姿を見られないのを〈声は聞けども姿は見えぬ、思ふお方は時鳥でございます〉と〈洒落のめ〉す機転とセンスの持主として登場するのに、五章の方床の場面では全く洒落の通じない朴念仁であること、佐の市がお久米を想っていることは、お久米は勿論〈他の余所目に懸ら〉なかったはずであるが、お久米のこととなると感情的になる佐の市の様子を見て、足尾に行く客でさえ気付いたのであるから〈口善悪なき婢等〉が何も気付かないとは思えないこと、等を蛇足ながら指摘しておきたいと思う。

また、表現の面白さについては、本稿で引用した箇所だけをみて

も納得のいくところであるが、一例として〈お楽み〉という言葉も挙げてみたい。まずこの言葉が最初に使われるのは第二章、佐の市がお久米にお茶の接待を受けて、〈闕の上に踞ま〉っているのを目撃したお勝という婢が、佐の市を〈先刻はお楽み〉とからかう場面である。佐の市は、

見えぬ眼にもお勝の方を見送りて、にたくと笑ひ、先刻はお楽み、と口の内に繰返しては頷きつ、二十九番の座敷に入りぬ。

ここでいう〈お楽み〉が、男女の仲をからかう言葉として用いられていることは断るまでもないが、佐の市はお久米の恋人に自分が見立てられ心が内心嬉しく、お勝が投げかけた〈お楽み〉という語の持つ余韻を、自ら反復して楽しむのである。言葉の持つイメージ力とでも言えはいいのであろうか、キャッチボールのようにそれは伝えられ増幅されていく。

次にこの言葉は、四章中、婢のお福によって齎される。お福が眞にしては沢村玉之助より〈美き男〉が内海秘書官の座敷にいるという、たわいない噂話の最後に、お福は〈お楽みと反対に一つ拵いて逃げ〉てしまうのであるが、お勝の時と違って、この言葉を聞かされた佐の市は〈惘然として曇時佇〉んでしまう。それは、この〈お楽み〉と噂される対象が自分ではなく、お久米とこの〈美き男〉であるためである。同じ〈お楽み〉と発話される言葉が、今度は佐の市を〈惘然〉とさせ、内海の〈座敷を覗〉うという騒ぎまで引き起こさせてしまうことになるのである。

三度目に〈お楽み〉という言葉が現れるのは七章、お久米の縁談の噂が〈真実の事〉であったことを佐の市が知った場面である。

お久米様お楽みでございます、と冗談らしい謂ひながら世事笑ひせる顔色、平生見るとは変りて、その物凄さ、襟元に風の浸む心地して、お久米は思はず母親に寄添ひぬ。

と、それは語られ、佐の市によって発話された〈お楽み〉という言葉が全く内実を伴わない、表面的なものであることが暴露されている。

このように、〈お楽み〉という言葉一つをめぐっても、なんとなく様々な人間模様が展開されていることだろうか。紅葉は作中の異なる三つの場面に、同一の言葉を配置することによって、佐の市の心理の変化や感情の機微を表現することに成功したのである。同じ言葉であっても、発話される場や発話者、また聞き手によって、そのニュアンスは微妙に変化する。そうした言葉の流動性、奥深さに紅葉がいかに敏感であり、自覚的であったかが、わかる事例ではなからうか。

また、『心の闇』と前後して発表された作品との関連にも、興味深いものが見出される。菅聡子氏は佐の市を〈存在の根〉を持たない〈家なき子〉と呼び、主人公が女主人公との結婚によって〈家〉を獲得しようとする設定が、〈すでに『男ごころ』の東山公恒にその一端が見られ、さらに『心の闇』以降の『多情多恨』『金色夜叉』の二つの「男物語」で繰り返されることになる。〉と前後の脈絡を捉えている。本稿でも金銭欲に関して『金色夜叉』に通じるテーマ

を指摘したが、筆者は〈家なき子〉というより〈幼児性とも言える一途さ〉を、『心の闇』『多情多恨』『金色夜叉』の三作品の主人公に見る。『多情多恨』の鷺見柳之助の妻の死に対する悲歎ぶりや言うまでもなく、『金色夜叉』の間貫一が宮の裏切りへの復讐のために自分の将来を棒に振って高利貸しに転身するあたり、一般常識の罫を逸脱しているように思えるほどの一途さである。それは『心の闇』の佐の市と通じ合う。また、これらの主人公たちは、菅氏の指摘どおり〈確固たる存在の根を求めて〉はいるが、果たして〇〇家といった〈家〉を求めていたのだろうか。たしかに明治期に於いて〈家〉が人々に与えていた存在の大きさは現代の比ではないだろう。が、筆者には、もっと個人レベルの〈家庭〉の温かさが求められていたように思われる。更に言えば、『心の闇』以降、紅葉が描こうとしたのは、失った恋をどうやって埋めるかという各々の様態だったのではないだろうか。その意味で、恋愛対象を失った後に重点をおいた『多情多恨』や『金色夜叉』は、恋の傷が金銭では癒せないことを暗示したところで幕を閉じる『心の闇』の、設定を変えた後日譚ととれないこともない。しかもそれは、鷺見柳之助が〈友情〉という言葉で語る「肉」を伴わない恋愛のかたちを模索している点でも共通している。『多情多恨』のラストシーンには、床の間の正面に亡妻の肖像画、床柱には〈保を連れたいお種の〉写真が飾られている様子が描かれる。何故〈保を連れたい〉写真なのか。まさか柳之助の恋心をカムフラージュするため子供連れの写真を選んだわけではあるまい。ここには柳之助が求めたものが、母の子に対する愛情

に代表される〈家庭〉の温かさであったことが暗示されているのではなからうか。〈女の親友〉とお種を呼ぶ、この関係も、熱海の海岸で別れた後も、精神的には固く結び付いたままの貫一と宮の関係も、『心の闇』の語り手の言葉を借りれば、〈是も恋〉なのかもしれない。『心の闇』から『金色夜叉』まで、様々な〈恋のかたち〉^(注5)を写して紅葉が描こうと意図したものは何だったのか。筆者には、現実の世界では結ばれない——「肉」を伴わないからこそ得られる「恋の永遠性」だったのではないかと思われる。恋の一つの理想型がここに示されていると言えは言い過ぎになるだろうか。

『心の闇』は三度に亘って論じて尚、論じきれない魅力に富んだ作品である。須田千里氏の校注を手がかりに、若い世代にもっと読まれることを期待したい。

(平成十五年十月十二日脱稿)

注記

- (1) 本稿での『心の闇』本文は全て『紅葉全集 第四巻』(平6・1 岩波書店)に拠る。
- (2) 『尾崎紅葉』『心の闇』私論(一)〔樟蔭国文学〕三十一号 平6・30)
- (3) 『尾崎紅葉』『心の闇』私論(二)〔羽衣国文〕十四号 平15・3)
- (4) 『尾崎紅葉の生涯と文学』(昭43・10 明治書院)
- (5) 『新日本古典文学大系明治編 十九卷 尾崎紅葉集』(平15・

7 岩波書店

(6) 『心の闇』の中で、佐の市の笑いが擬音語を伴う形で示されるのは、〈にたくと笑ひ〉(二章)、〈呵呵と笑ひ〉〈にやくと笑ひかけて〉〈鼻の頭でふくと晒へば〉(七章)に、お久米の見る夢の中の〈へへへと三声の笑声〉(七章)を含めて五箇所あるが、二章の〈ひひ〉という笑声が最も不気味さを表しているように思われる。

(7) 須田千里 前掲書(注記5)「恋のかたち」の項参照。

(8) 『心の闇』試論—彷徨する佐の市—(お奈の水女子大学「国文」七十四号 平3・1)

(9) 『紅葉全集 第四巻』「解説」(平6・1 岩波書店)

(10) 小森陽一『構造としての語り』(昭63・4 新曜社)

(11) 仲田定之助『明治商売往来』(昭49・3 青蛙房)

(12) 週刊朝日編(昭56・1 朝日新聞社)

(13) 「芝浦の朝烟(最暗黒の東京)」(其八からは「最暗黒の東京」と題して、明治二十五年十一月十一日から翌年の一月十四日にかけて「国民新聞」に断続的に連載された。後に「探検実記東京の最下層」(明26・7・22)と併せて、『東京最暗黒の生活』(明26・8・9)と併せて『最暗黒の東京』(明26・11 民友社)として単行出版された。

(14) 週刊朝日編(昭56・10 朝日新聞社)